四神地名録

四

内閣文庫
和書　類
一一三三二號
五冊
一七四函
四架

内閣文庫		
番號	和 11332	
冊數	5（4）	
函號	174	16

国立公文書館
National Archives of Japan

葛飾郡之筆記

葛飾郡ハ武蔵の國乃風土記ニしるし顕云歟なれとも
まし古總の國ニ葛飾郡を記しつり大宮地
遠ひおこれとも上古國乃葛飾郡ハ下總の分郡
云ニ隅田川を限し江戸ニ於て之説ニ縄ニ武州郡なり
入り當所ハ足立郡しらりも勝まで風土よく貧しく
又也る宅すらかなし小泉といへとる屋根しまま
まて壊落れ古民とハ稱しかれとも地面田畑あり
門に改まりて此事なるへしそれよりまたく成

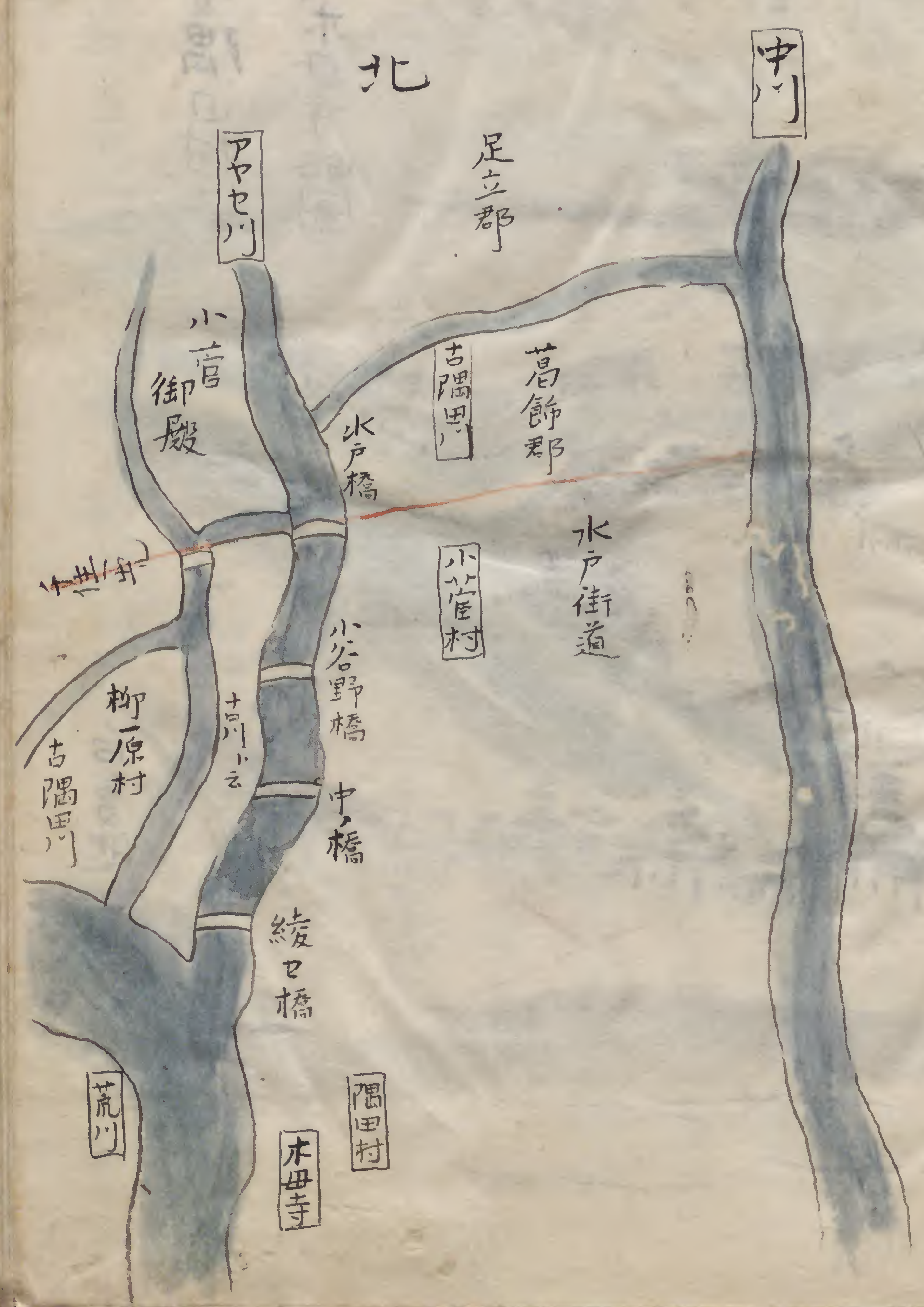
明治十三年購求

国立公文書館
National Archives of Japan

華あり

隅田村

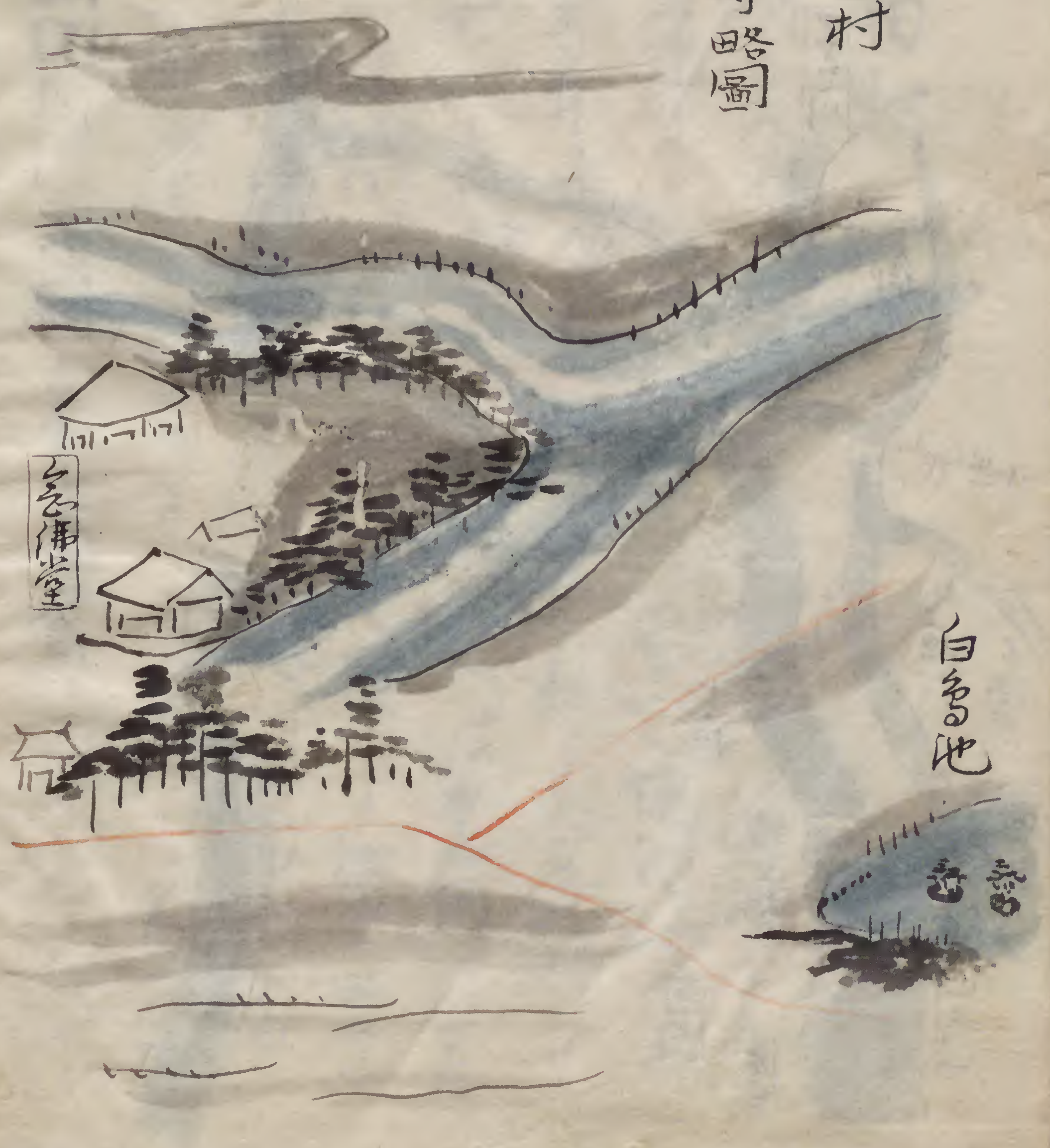
古へまし村と称せし處にあり墨田川ハ此村より
北にて足立郡と葛飾郡の界にて隅田村とハ
より内と隔りて至り今ハ埋り田となり流れ去りし
何さしの村の古人ゟ古ましし川といくは墨田の所
有古寺にある隅田川の実跡なる無し江戸砂子
にハ荒川を隅田川と記せり隅田村に流る所
流れし川なれを此辺に於て無まししか川と名つけ
しも無理なしまで無まれとも里人のいふをまつて



凡まさに古隅田川実跡にすまで無し

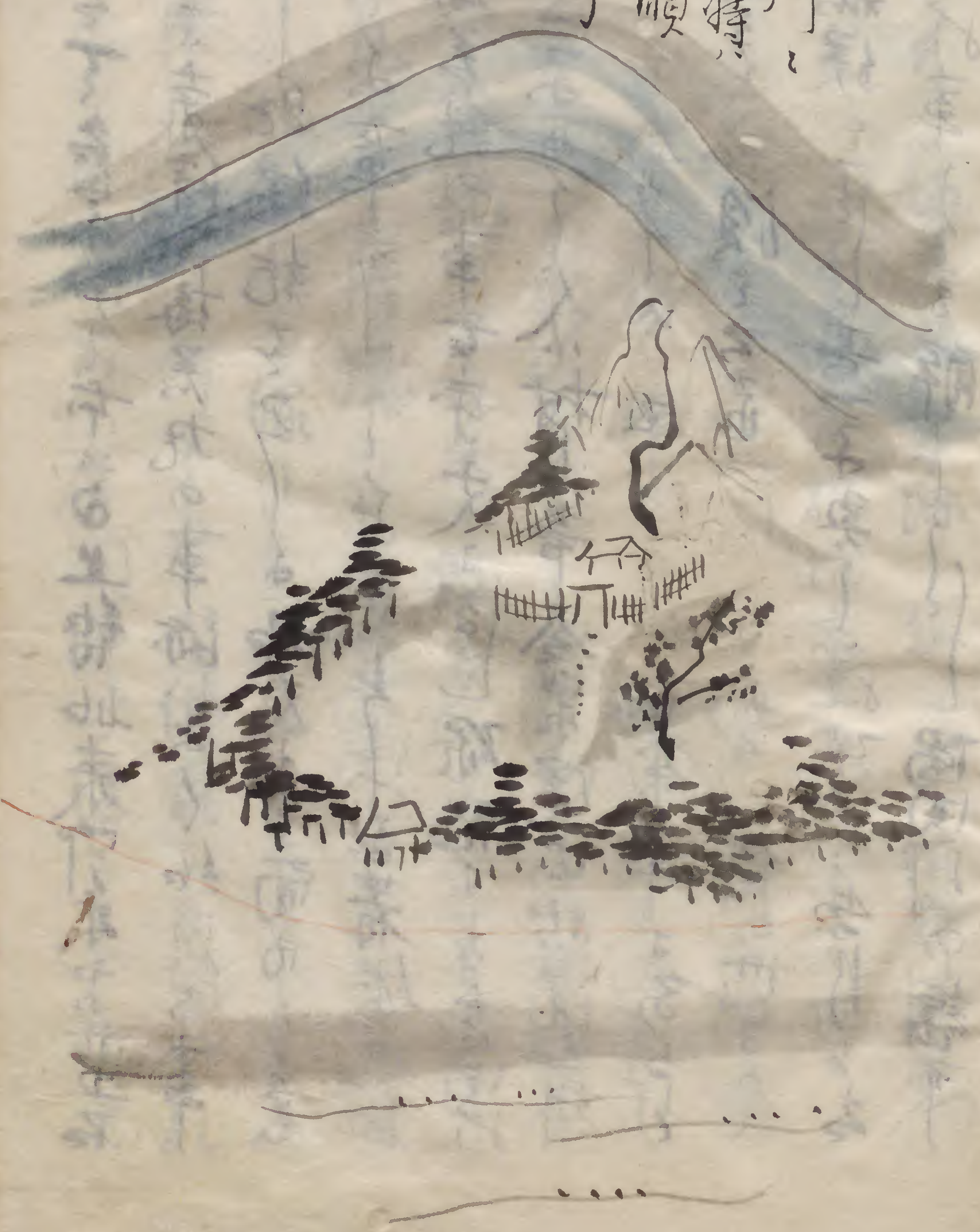
葛飾郡隅田村

梅柳山木母寺略圖



此流ヲ向川ト称ス首尾ハ荒川綾瀬川千般ヲ流レミ古川之

西



當寺は天台宗にして本尊は上智如来 御朱印廿五石
大概よき寺院へ梅若丸の事跡はよく知れる事
なれは略しぬ縁記をみるに和文にて面白く書
なりしを章わけしてときしるして著述せし
ものゝ梅若丸の事古来文なし縁記には吉田
少将の一子にして父は村上帝冷泉院円融院三朝
に仕へし人にて今年迄凡八百余年になると
かう梅若丸は其頃を去る事一條院の世にして今の世まて
いかし諸侯のことし其子孫はたえてつひにかくなりしと
古しへの事なれとも解しかたし隅田川の謡に

記せしかは梅若丸の事跡を知らしむ佐野原處
岩城判官の二子安寿姫津志王丸の二人世に
あまねく人のしるより隠れにても当時の浄瑠璃
におもしろく狂言綺語のおもむき作りしものにて
文より近松なとも世にあまねくさらに色を物語と
題して虚説の草双紙抜多く作りしものなり
今梅若丸を山王権現と祭れる當寺天台宗なる故
なり都の北叡山を縁とし山王と定めしもの
なり何ぞ唖しよし何にも世に佛家にまちまちあれ
天竺にもなき虚名を作り唐国佛と信せらるゝを

日本の人を移しけやまふみ道をもとかるへし
室柄は梅君の持しといふ末廣の扇子なり
當上は江戸へ御下向の七月隅田川の詠哥し
後二条院大納言
事とへいまそ入此月のすみ田川
都のともも見ん尚なれもなし
此外も略しぬ
同村

清滝山蓮花寺新儀の真言宗本尊阿弥陀
如来御朱印七石此寺は聖徳太子の縁有り
縁記を見るに北條頼時の守り本尊にて此
寺古しへは鎌倉佐介谷にありしを経時の一子頼
外出家し此地父の経所なりし故に幽閑の
こゝに鎌倉蓮花寺を此地へ移し太子の縁を
安置し奉れし事なりしかしは伽らんの
地なりしを天正年中下總の千葉家両家と
亡られ合戦度々の事ありて其頃よりして
此寺衰微せしといふなり

須崎村

卅也の事江戸砂子にいはく昔の此
牛の御前の家勝寺に遺りし所とし地中ゟ
堀出せしといふ釈迦如来を彫刻せし青色の
長五六尺ばかりの石なり諸にいふ貞観十七年何月
何日と有り今年迄凡八百有余年に及ぶしき
古佛といふ画し僕其名ハ志れねど須崎村の
若宮の宅の石橋にせし石ハ像なり釈迦如来
の形と今世にいふ画しと書遺して古雅物に
見へ侍りし也

渋江村

起跡山西光寺浄土宗の寺に葛西三郎清重の
墳あり露しの洪水にも崩れの墳いふといふして
今清重稲荷と号して女しき社なり葛西の
三郎の事ハ東鑑にも記して鎌倉右大将家に
ちゆうきんありし武士にて葛西の地を知りし
出生の所とかへりみ見ハ其あるなり墳にも見えしハ

上木下川村　古人ハきね川とかいふきげ川あるハし
かしこ亀屋川ともいふ

喜龍山淨光寺天台宗ニして叡山慈覺大師の
本尊ハ薬師如来傳教大師の作佛也東叡山
石境内ハ除地にして其廣大なる祖茶枚十石
納る事ハ相傳ふ
東照權現樣葛西御征伐ありし時ニ此所御陣所
となりし其地を除かるゝ事也
かくれなく廣しゝつゝ村之分二の一なる寺地
除地とて是へ付ありし什物ありしなり
權現樣　台德院樣の御尊像を
大猷院樣御画き給ひ此寺へ下されし宝物なりとぞ

住持の檀語なりし頃かれ是なる池を浚ひし時地中
より掘出せし唐金の正觀音なる古佛ハ是ぞ
御膳所となりし寺なり

篠原村

古人おやぢが墳といふ古墳ありおし高く築きてあり
其の先樹つたなり名主の住所の御庭何畝地と
申て今もよし旅人の行かふおやぢといふを帰る人の
やうよ今なれとも古しへハ婦人の名にも古の字を添へし
事なりしら墳なりしとも相傳ふ事のなきハ惜しき
とつふ悔し柳を植へハ菊をまつとし杜若のやめ

花菖蒲の類まてしくは草花かきりなく花壇を
巡るぬまゝく同をよ絶こしもせしつゝ京大坂の
在しみと諸方へ下まて植木屋も多事なりしに
なるみてかくのことく広大なるゆあまたなけりまて此度
南方より拾十里江戸をとりまきし村よ
専菜物を初とし上方より書物とうそ植木草花を作りて
江戸へ出まてしておひしあにしくしき事ゝ梅よ江戸の
繁昌ゆてゝ大ひなる事諸人の存しかるよ広き
事ゟ見へひ候しの

下千葉村

清滝山正王寺 真言宗寺山鮮なりしまて本尊阿弥
陀如来門外前又石中像起しき地也押葛飾郡
ありての御朱印地もある也とに違ひて広くしるみ
田畑も拾多納る事ゝに午亭郡豊島郡またい御朱
印也畑方なり納米ゆ分れるゆあてし中よい御朱
印高拾余石あまし寺へは納米俵よ一石汁りの
許もうりしゝ荏原郡玉郡またい畑在所拾多
なる者利米を食事とせる百姓ハ五る稀なり
足立郡葛飾郡ま田方八分の村しまし畑へ
江戸へ出まて廿ん余まのをと拾多作る事まりし麦作

おほくなりゆくありさま中頃上の百姓まては米を食
事とはならさりし衣るゐも婦人の棉をのみてハ
勝手ならて藤茶につかひしとて今京衣の荒を貪へ
衣の荒なりたとひしに似たり其所ハ撰ふへき
事なりし天道の細工ぬしてあるものみしなれ
山の奥遠く鳥の囀りすれとも其地相応に人
住ては其身を養ひかねたるは時をまつ事ニ入る
としてハ計るへきにあらさるかしも

同寺

境内に大樹多し閑をえて鳴の巣をかけしあまたなり

雛鳥も見へ下枝にはしけりて鷺の巣
も営かしこに見へし中にも鳴の巣近
く鷺の多くすみてハ鷺の住所へあまりに
鷺ハより鳴の羽虫をとるもの有りて鳴ハ能ひてハ
あそひとも纏和しなし鳴の巣へも蜂の集る物
にして鳴の雛鷺雛件まゝる有り鳴より鷺を積
すへ蜂の卵をみせさ鷺の巣へも蛇の子をとりて
来るものあれは鷺の鳴によりみて蛇の卵せきしと
まとる事あるに見へけのことく鷺の巣数多けりて
来ては其中にみまれて鳴と鷺とハ賑かしき物へ

と梅諸なりし僕初めて入りし事まて鳥獣と
いへとも自然と其性は生得をそなへて形ある物に
心ありて心ある事も智ありて愚ありとしるへき者と鈍昆
に於ては鳴に形は大ひなる者は小なる蝉を
悩せしむる不叶して虎をしのく虎は形小なる
者なりし蛇をと悩せしむる不叶して鳴をとしのことし
誠をともつて昆虫をもしたかはゝ不國事之人と
かくありてあるは尤なりと　僕七つにしてなれとも我
思ふ所をみとしてせ新なりとするは虎ありし也
は大ひなるもののこと鳴なしまなく蝉はなき者のなして嘴を

たらく者なるし古人見をとなく蝉とて子
かくし見をと甚しきいふ

上千葉村

日照山葛賢寺といふ宗寂山法花宗法京に安年
中に建立ありして今に至るまて五百余年になる也と春
田とつひし佛師の作なる薬師如来之寺中あり
葛西六郎重氏といひし人の石塔ありて世なあり
古き石塔ありて何とも文字は消へうせてなし
葛西三郎清重は氏族なるへし当村にも加らん
は地なりし頭を相多る隣村なる葛賢寺村
なりとも此寺は舎地なりしと云伝ふ事なり

立石村

此村に立石と称せる奇石あり是によりて名
むかしは四五十村の村名とし立石村といひし
よし分れとなりしか今は此むらのみを立石村と
称せ侍せる石室は此石ある處を氣よしとも石は
ろく定か中にあるかゆへ大揺を其人へ掘穿すと
もやふを傾らす深しと少し前掘入れて元は
取とる所はし立よりて今しに高室はこれて侍
ゆゑく大揺せし所々木はこ畑のてとしま畑にかゝれ
案ずるに中にある全く本の石にあるよし奇石とふ

垂し石は質は立るは菊石めくて砂に泥もと
其へ多く似りしや乎荒色は和らかなる石也
按ずるに活蘇石なるへし伊勢にも活蘇石は土物
をこんなる揚縁りて常に出し事あるは猶に活蘇石
とも名つけらし鐵石を生石とあるの事
まてし常陸國府の茨石と称せ侍るも生石あり
俗に根付石とつよみて家も大抵掘りても石は
根付ありこんごうてより生へ出しやうに
思ひて石もあり此立石も根ふかき石と云並中
にあらて其中にありて元のごとく今に石あるは

沾薦石といふても至理なき名也

同村

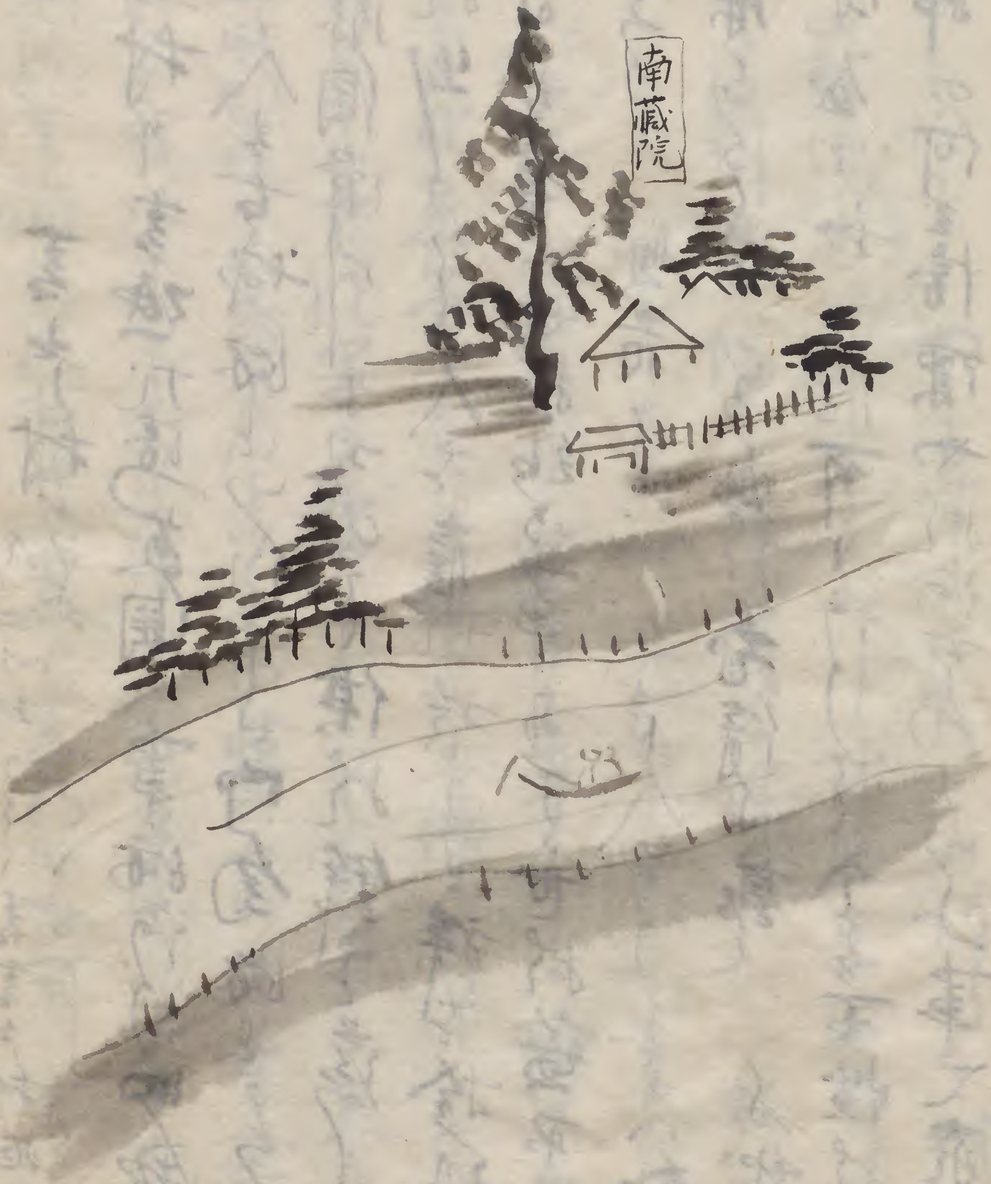
熊野三社権現の田地にある小社なるも神体
は神代の石劔なり則図のごとく

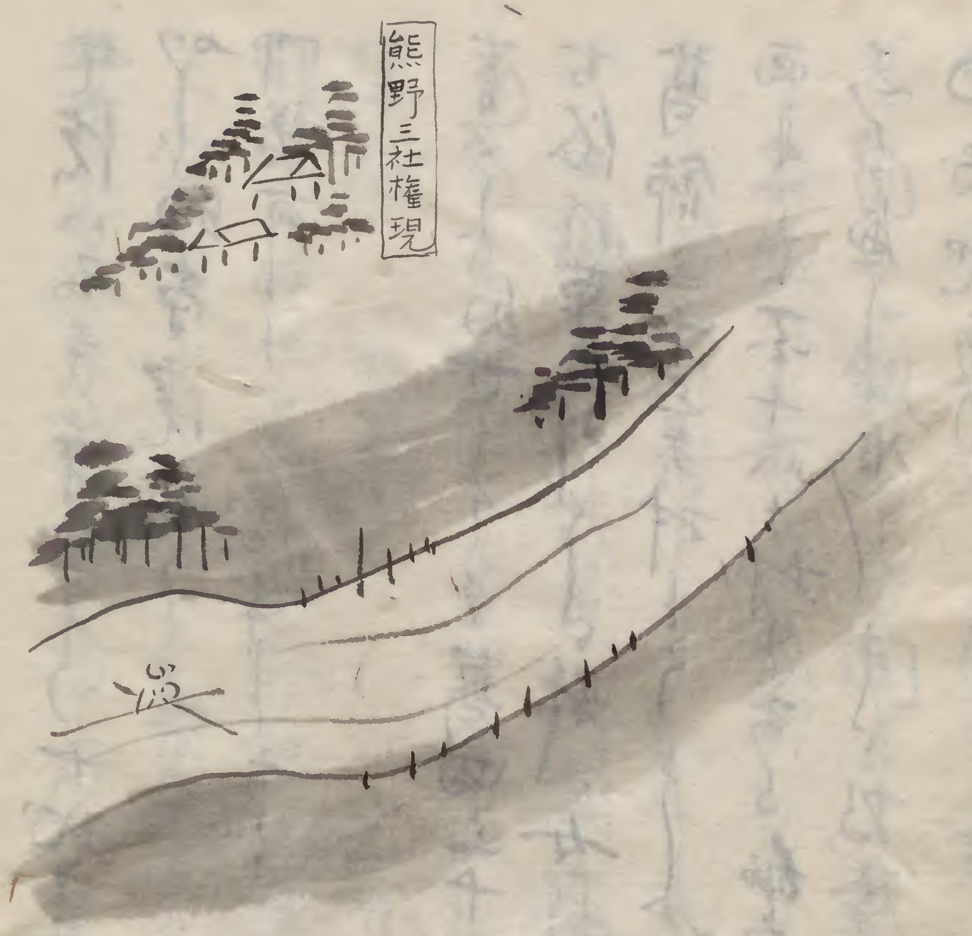
石神井村にある石劔なりける石質勝れて吉

色も濃細き美しき石は理なる重き事ハ案外
なり宮中に銅鉄の重きも及ぶ事あたはずして
初見なれどもふるくなし石劔といへるも此海内
に珍めても至る稀なるものにして好事家
よしきかれば日本にあり又いたるところにてはなきもの
やうに称誉せ所是へ世に伝はる面白きうち
あてし二つまでもつたへたる事不思儀にとまりて不遇し
平和ならずときし遣しを思へる僕ハ無なき同
刹なれども此地は石劔なる玉石にて違ひなきやうな
是也上手は玉三つきさま譲せるなる也をひとつを

生して玉となる由し古しへ同本武蔵武芝
を納たる劔し国として武蔵をもつて国号と
まて石劔は上世の武器なり太古の石劔も同
本武蔵の蔵しまひし武器なる由しかゝ
ゝる神宝の武芝御国に納る事万代をうごさ
きなきを信しといふ由し
里人の云傳ふなる紅師三所權現の地は安倍の
晴明に住せし旧地といへり清明伊世国に住せしと
いふ事古書に見ゆれは食地まてもつたへしなや
五方山南藏院立石寺といふ古き地なりにして

其説はなきにあらす古地もきそれいまして恩し
かゝらぬ寺院ありて
御膳所とする寺といふ
遺らぬ世までも葛西三十三ケ村まで今こと
古俗の草苅して贈ぬる女の習しこなと
葛飾三十三ケ村といふよし今までは東
西あて五十八ケ村となるる繁昌さてもけて
志る由し追々まて数を増由寺地の利足
少なき地なり





付川の曲り
九十九曲りト云
大藥北方より
南へくと流るゝ
川也

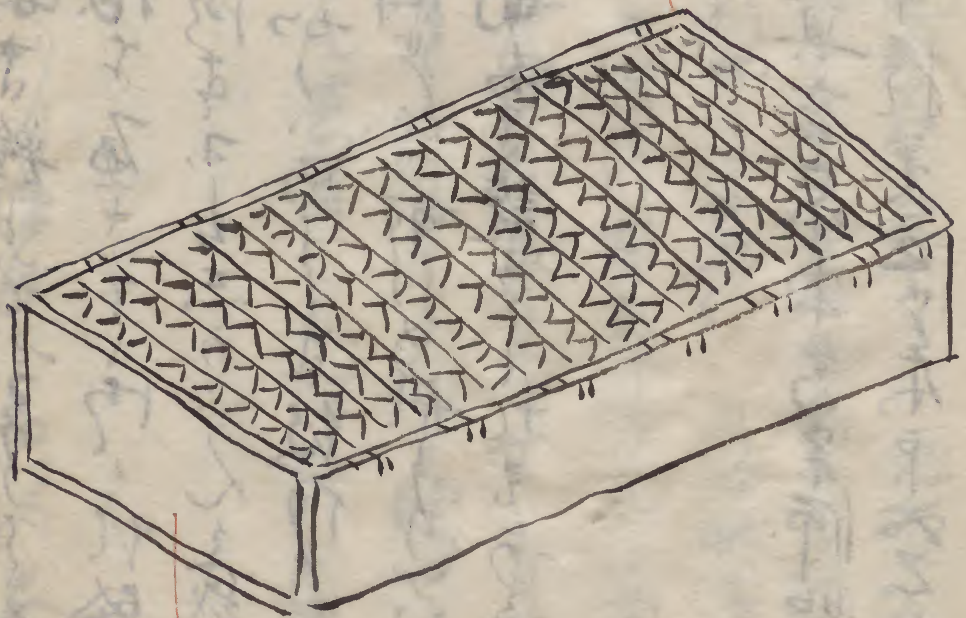
青戸村といふ 今二ヶ村にわかる 東青戸村西青戸村と

此村は青砥左衛門藤綱の事跡有り 御殿の地有り
古人は古城跡といひけるを御殿跡ともいふなり
藤綱滑川においての僕は錢を落して松明
は出して人を雇ひ捨し錢を拾ひ取りし
事は普く世に知る事にして世の益民の益に心
を用ひし賢者ともいふべき人なりしかば數百年も
隔たりぬるなれば其侍の墓といふ地もなし
陳屋と称せし所ありけれとも今は百姓の宅地にて
墓の何ともなく其何ともいふ事さへ知れ兼ぬるに

寄もなからんやと尋ねしに尤なりとうけまゝ村場所
刑罰場と称しておかしけれは空地ありけり尤遺は
御仕置場といひし侍に穢多非人首斬居住して
是とても須かりしは穢多部といふ也 青戸の文字
を違ひまなしたる此事を尋ねしに砥の字を書にし
古くなる筆すぢなりしかども漸く珍る文字なれば
出よろしき戸の字を書しといふを見たる文字に伝り
此村の旧名を百姓の家には青砥左衛門末孫
と思ひしといひ傳ふ山葵おさめしといふ
国にて地は古き器などを堀出せる所有りとみえるに

至る百個法のもれまてハ今の世なるしとなりぬるを
誰もかゝる事を便りなる摘をも用ゆ専まゝや甚須
の風俗をおさめしるかゆくまし志ゝし萬屋も
下しの貴なる事をいとひし智ゆゑり人多り
れまにも自己の工夫りして鋒のかゝらぬやうに
思ひつきの大根あ随しくなる事し何かしても
用ゐられきは、ゝしきゝ是といふ事なし尤
右圖をいふ也

青海七遠大根脱



杉ノ四分板ニテ高サ
二寸九分長七寸五分
横四寸三分

是ハ竹ノ厚キヲ鋸
ノ歯ノコトクニシツレヨ
左右ノ板ヘ切ハメウヘ
動ヌヤウニシ竹ノ角
くニテ大根ニテモ山
葵ニテモ削リヨトス
ヤウニセシモノナリ

ロニテ是
ヨリウツシ
テトルヤウ
ニセシモノ
ナリ

むかしは料理所にかき鱠といふありて今まで
も春日祝儀日にも大根を盛きて是に鱠をもる
事なり甚古根をおもふまでにあらん或人は
回せり物史の形所似かくのことき役りえれを
山葵おろしと称ふ図せる所の形より言出せし
ものならんといへり両ながら説なし此もつる俗

同所

東王山宝持院新義の真言宗本尊薬師如来定
山雜勝法印天養二年に建立也本尊定古者

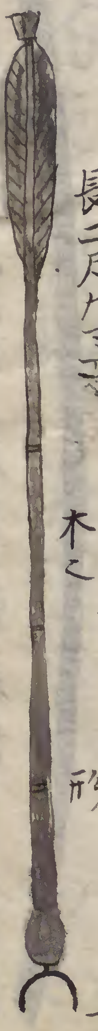
寺といふ極世也本尊地文石なり地下一丈斗り
まふえに出し事何国なるやと本尊地といへり寓る
田畑の多き事足ぬやうに思ひしに此寺ハ
かきりて地下おきいか何の方なりんとやすると
実事なし かしまで住の定ありせし事定
なん古人の四月の明らかなりんと読せと白
雲の廣ふみえいふん甚る しかし也しなる
もの也

坂塚村

夕顔の觀音と称ふなり由にて鳥の巻より

名づけし佛なれや何よりても充つけんと立寄
りしが前に一もと樹ありて其花のさかんとせし林
中に悪しき蛇の害有り住僧もすぐ侍りおしき
草ぬきし庵なり里人に命を無事なる故名主は
隠居ありはじし時代の志しをつくされ名主先
祖何某が数百年以前江前に建立せし薬師の
数百年も無かりし此地にて第弐郎の霊験なし
自此金がする請像せし観世音といふ無夜ある
其名主なる家に止宿せしよりうるしくる之傳人とも
今で上に数百年無事に住居せし家なとかなる之立

代江前近き高饒に営せしとなれ事あるしも今は九
おもなし又されば其刀箱相のなし古びたる古物も見へ鎗樹て
数百年持傳へしつらや互るもあつへしと矢の
家よりても一段せしが図れてきまち矢也僕は古物を好
み諸国をおしてよりても上世の武器を見しにいかかる
矢もと見ゆるもすなる射法をさしてされる何にか用ひし矢
とて事を知りまた甚同の射法に用ゆる矢すでにつかなとも
か何ぞしても形りしおとうへし



長二尺九寸弱

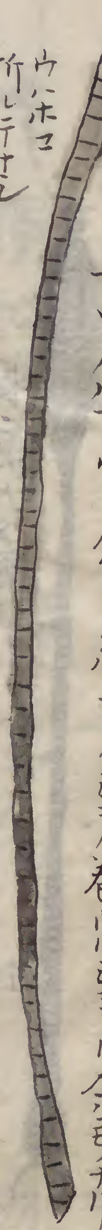
二本二分
木之

鉄ニテ半月ノ形

一寸余

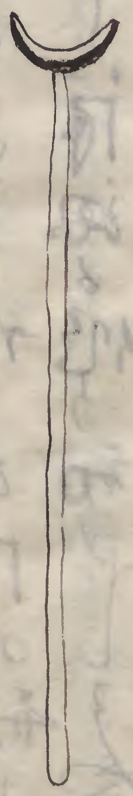
桙は長き弓を製し初めしより遣はぬ事と
なる武器の時代かはりしに内にもみちかの九本のうちに
遠くひろまりし事は今下同様四節の御數山の跡には
熊野の武者を持劔せし弓矢を持傳へし子
孫今構へたりしかうへりと云見を見し人の物語りを
聞しは弓みちかの九本のちへと云まれなりけり
薩摩の國中の弓類に於ても持せ給ふかつきちりける
こみちかの弓しへに製せしちへし古ちの形を知

ウハホコ
折レテナシ



長四尺八寸少シ余リヲ糸ニテコトゴトクシテ巻ウルシニテトメシモノナリ

らず皆人は寄弓といへとも德津家は積胡より
傳へ給ふとせし田代守氏自然に古風縁りてもしれ
例をとりて古弓を取り返に於ても拾る事へ冊子の不定
実は何某と称せし投弓手ずに地に位存せし忠心あるも
自然にて弓矢の障りしものなりし
義經流と称せし皆具術にて弭劔といふ武器あり



弭の形は皆古は弭細と名つけしものにや
鈴を古しへのまきものゝ弭細を據によせし

人ゆゑとて今まで今の世迄つきせぬハ月毎
にかり出しものとなる宝れ古物並の
根かけりやとてもいまだ月の献せし拘れ
ハもし月毎の作り初めしとや射術は
家にて今も用ゆるなし

猿ヶ京村

此地に佛生山和同寺とて新宿にあり
和同年中の建立にして真の須恵人加藤把
有りしに国府甚落城の砌此寺も小僧下

常さに川より出る諸ひ長き竹れささまに嫁ゝり
泥武れ白鶴おりしと称せし献ましに今其跡れ古
似をしてて寺中にありしをましに国府甚落城の
時見しを遠く白い鶴とて落武者此ありに応じ
再ひ旗を揚しまやもてつきれ逃まうと大勢此集
り風上より火をかけしたる寺余炎ゝて焼亡し
又今書聞にて今のことしと物語せきたもかりし事よや
此村に古利根川の流れ北方を巡りて木の淀む所
ありて水鉄多し相伝ふ宝永元申の年の洪水の

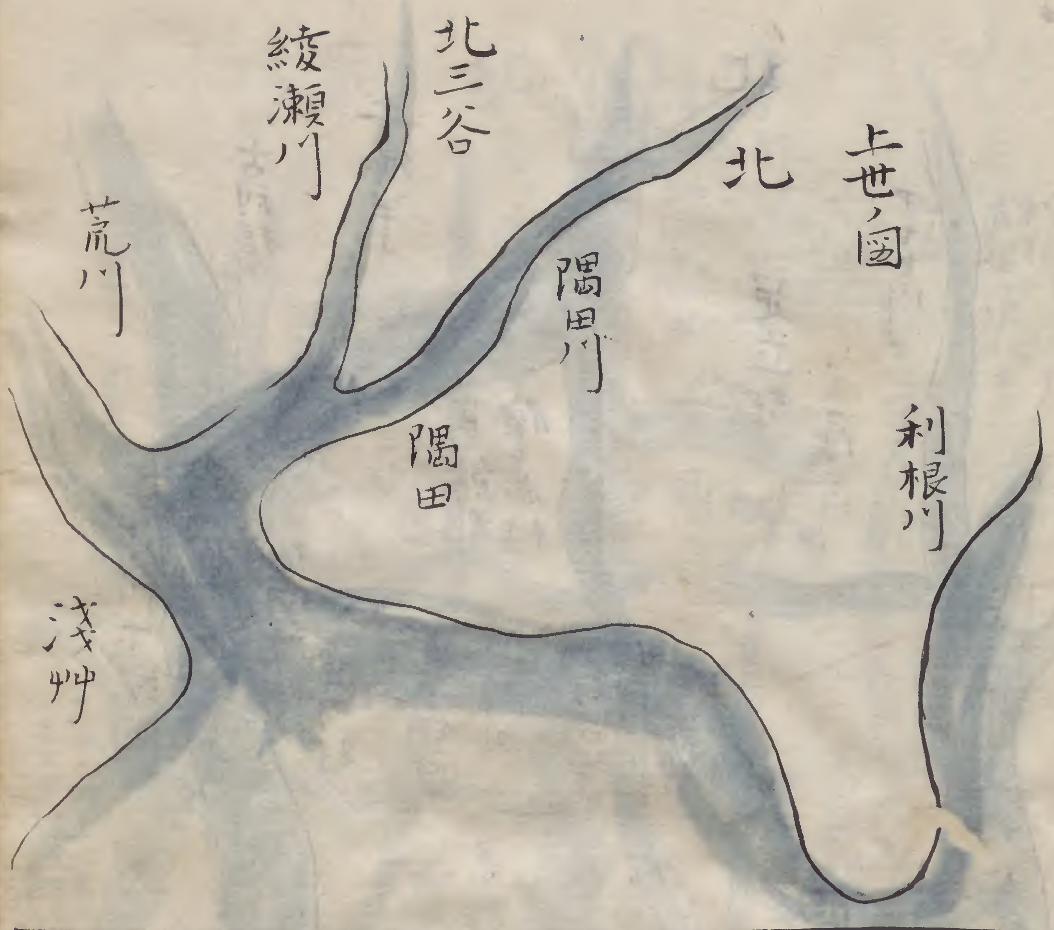
此川の堤きれ溢きて西葛西本所辺までのりて死
亡せし人数百人有し及て今伝ふ二合半の村にも地蔵
ましまして其名は水斬場とて祀られしとて
西葛西の村しかしかと堤の上より大勢集りて水を防
ぎし堤を切ふさぎしとかけ巡るを二合半の人々も
右葛西の方の堤きれよかしと祈ちかへて思ひしまゝ
とゞむる西の人は勢力しふして届かすもつて水を渇せし
在りしつゝやかくも切まさりし所は二合半の濟村と名
古しへ伝ふに二合半郷と成りしも形を尋ねしに今の世に
いふる郷村の以とは異なりし其時郷子のいくるでみて

龍の角のごとくなる二本角ありて鶏の毛を
かむりとせし獅子頭と三ッ獅子と称しは獅子
頭三つなる故に三ッ獅子とはいふや虬乃頭より
似たる頭ゆへに虬と云ひ獅子と称せしや古しへ
より伝ふ古説と云二郷半の百姓の中に水練
達者のものは獅子頭を被り夜明前と覚し
きに川上より浪をきり水を立てゝくるを
西葛西の堤をさして浮き来る葛西の百姓
是を見て大蛇なりと思ひ大にけおそれしより
おそれて我先にと鋤鍬を打捨て逃ちりし間に

彼の栁子村〳〵の堤にやすく〳〵と上り捨置し
鍬なとにて窓からしことを切りて隣村の外へ
らかさかゝる時も村も隣村へ二川栁子
を破りて堤を切りに来りし事と紛々と云
まちちなり堤は数十破れ古利根川二郷
半ヲ流し大水西葛西にこれきり落ちて
大洪水に及びし事と云と是によりて信村
の塔堤をもしくおり流して民家の助けき
まとれかたけ節は不遠　公儀よりの御救ひ
御普請なりて　某御老中様　御名を土人も忘れ候て
某御老中様とのミ云伝

御見合なされ　土民自由の取計ひ故に舟数百艘
をかけて下総国葛飾郡の方へ流れ利根川へと
舟あまたして今の堤となりて流されし事ども
又り宝永元申年は今年寛政は寅年迄
九十一年になりて遠からぬ事なれども名も十
人は七八人は知られ家に記せるは稀なる名も
掲げし二郷半の百姓三川栁子をかけり葛西の
百姓と争し堤をきりしに二郷半乃水
難とのかれしは舟の田舟が少なくのなりてまで
ゆるし　欲を追ひちらし舟図の難とのかれし

小儀ながらも溜池揉斗之道を
以て論せる罪なきをもつて加へし田舟の溜
除ともに是非ある通し



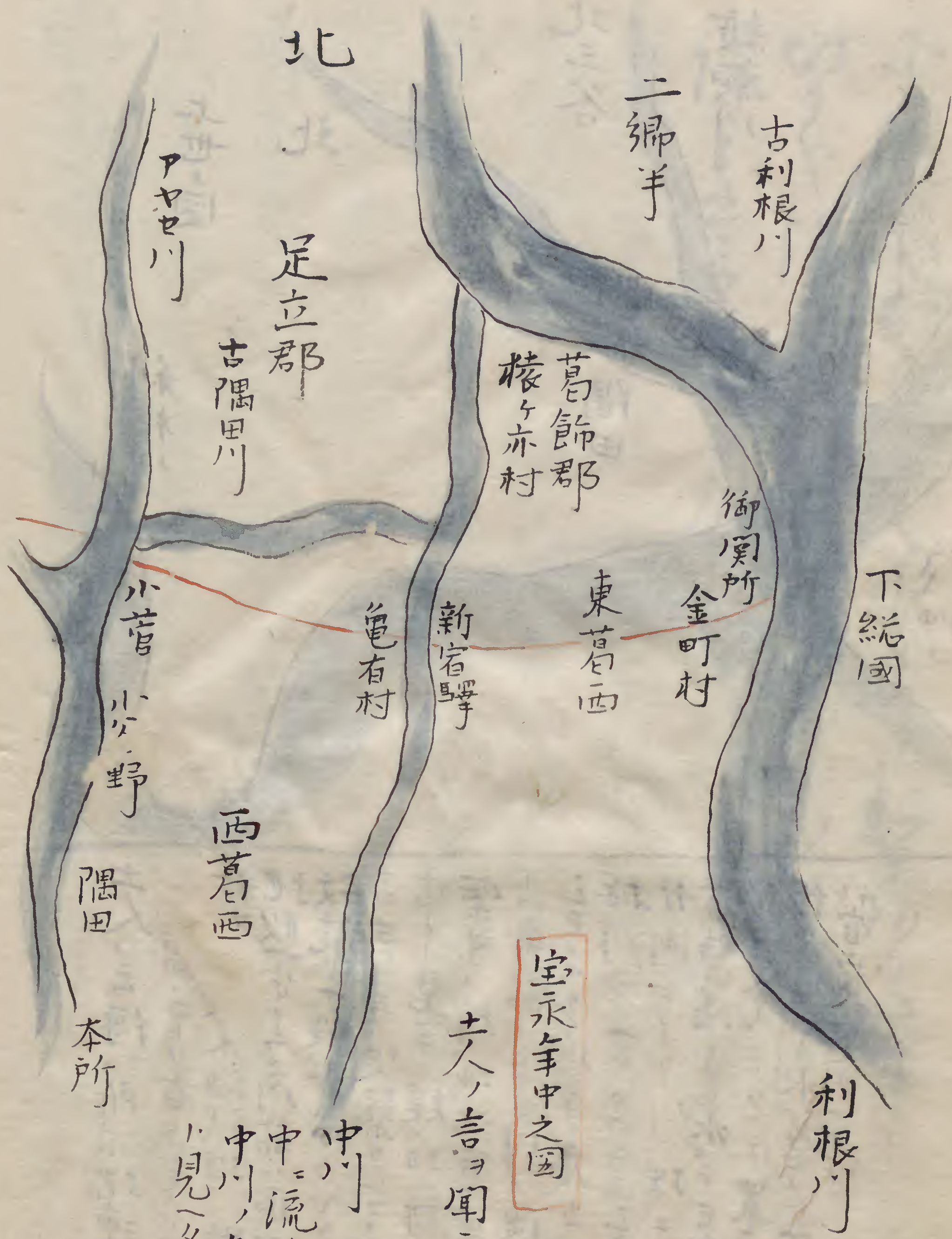
土人ノ云傳フ所ト地理ヲ考ヘ見ルニ
上古ハ圖ノコトク有リシモノト思ハレ夫ヨリ
數百年ヲ以来海沢埋リ時代ニヨリテ
地形一定ナラス川筋ハ原野平地ナル
故流レ千股ニ分レヤウヤク新田トスル
ニシヨヒ所々ニ堤築カシコニ塘ヲナセシ
事ト見ヘテ堤ノ切レ所ト云傳ヘテ
案外ノ所ニ池沼有リ是ヲ以テ見
レハ幾筋トモナク川ノ流レツキカハリ
シモノナリ近年度々洪水セル事ヲ
按ニ川巾ハ昔ニカワラスシテ堤キワニハ
付洲高クナリ川ハ埋リテ浅リナクシ故ニ
昔時ハ溢レサル水ニテモ今ハ溢ルルト見
ヘタリ今ノコトクニテ置ナハ今五七十年
後ハイヨイヨ水ノウレイ有ヘシト愚僕カ
管見ノ見ナレハ信スヘキニハアラス

今ノ地形

土人ハ江戸川ト云源ハ上刕信刕及吾妻川烏川神渡川小山川廣瀬川思ヒ川姿川落合ヒ栗橋驛ノ下ニテ赤堀川中利根川ト分流シ関宿逆川ニテ再ヒ落合ヒテ又利根川ハ東ニ流レテ下總ニ入リ一流ハ爰ニ落ル

源ハ星川ト元荒川ト落合古利根川ニ入リ猿ヶ亦ヨリ中川ト称ス下ハ

宝永年中之図



土人ノ言ヲ聞テ図セリ

中川
中ニ流ルヽ故ニ中川ノ名ツケシト見ヘタリ

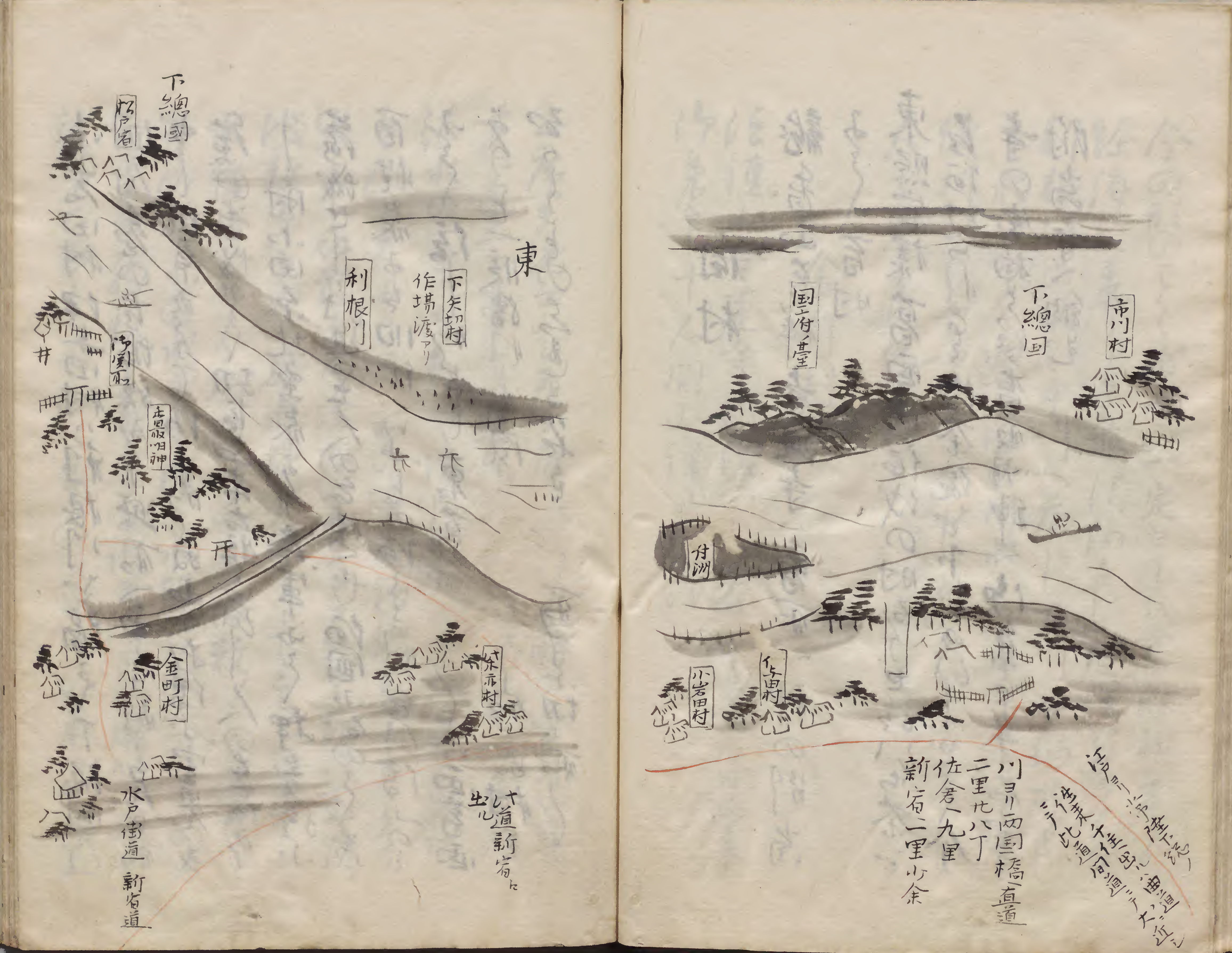
今の形のごとく地面の一定せしハ享保初年分
経海に臨しき井沢何かし地理を考て古
利根川の水を中川へ落し古川を溜井とし
其水を以て西葛西の用水とし舟の通行彼ハ
便利なるやうになりしその功なりし
人皆思ひ侍りぬ

金町村

法優山金蓮寺新義の真言宗本尊大日如来
御朱印十石開山詳ならず

同村

龍香山長禅寺此寺ハ香取明神の別当
なり　当村
東照宮様葛西御征伐の時寄らせ給ひし此茶を
召あげられ其御茶碗を下しおかれしとそ今
寺の宝物とし香取明神へ御朱印十石也寄
附当寺へ納む



下總國
松戸宿
東
下矢切村
作場渡アリ
利根川
御関所
葛飾明神
金町村
柴亦村
此道新宿ヘ出ル
水戸街道
新宿道
下總国
市川村
国府臺
中洲
伊予田村
小岩田村
川ヨリ両国橋直道
二里九八丁
佐倉ヘ九里
新宿ニ里少余
江戸ヨリ常陸ヘノ通道
往来千住回ノ道ヨリ大ニ近シ
ヲ此道

小岩田村　伊与田村ハ利根川を隔て下総国乃
国府臺の古城跡なり此所へ来られし見る所
むかし風景なりて何しかしぬ山之お傳ふ里見義
讃の書城なりし切ぬ正木大膳と云し人の在城なり
し時小田原北条家より大軍来りて押寄終に
落城せしとぞ付近の土人の云傳へせし御国におゐて義
百姓家にも旧記と云ふもの何にされハ云ひ傳ふのミ
なく信しかたし東葛西の付しハ西葛西
よりも一眼隔れし風なく貧しかりぬ村なり
なりしもの土道なる名もなく所ハ切しあらしと

云處き池なりしを故に切れし時の年月を尋
ぬるに一ツ也して委しからす寛年の年乃
洪水の事を急や何かし角や何かし抱候
まれと更より見前の事ハ初節茂中之年
のとし以前も大洪水のありと見えて切れ所乃
池数多くあり因水塚と称して高く築し
水難をふせく墩乃ごときの塚数しけく
年のとしの水ハを論ず水塚ハ水のの又ぶし
なるとも云ふ然れとも昔ものる水なりて用心の為に
築きて並したもの年のとし以東ハ中以上

の百姓家より水塚のなきをはしるやいづれも
高く築きて繁きは垣なく山のなき所
なれば左の用心なり

利根川は坂東太郎と称して古しへよりも
海内七大河の其一河なりて常水の深サ川
中村として一定ならざれ計ん通りて

七大河と称せるは筑後川筑後 四万十河土州
犀川信州 淀川山城 阿武隈川奥州 北上川奥州

六月中旬の頃東葛西の村々へ通行せしに
六月初旬より雨なくして以来雨さらになく旱
魃こそ甚しかりしに田場を見しに畑は水一滴
もなく所によりては土手破白くなりて稲の根
みかれたれば今也者のうちより雨なくば稲毛葉
とまれ倒るゝまでになりけり此辺は雨にて中川流れ
東より利根川土人江戸川と云めぐりて川と川との間
潮と廣まりて七八十丁程ある所なれ六丁ばかり
人力をもて汲みても逆水をひく幾(?)助けても水を

云へる地のたしみあり僕が國におゐてもかくれ
なき事の所なりて旱魃年にも十村を弐十
村を和し語して川水を堰き海を埋り
て一等の水を大和車をもて二壇より三壇
より汲車と称して手車をかけならべ一村
してかして数り番の法度を定め昼夜懈怠
なく踏ける時は三千石や一万石の田場を救ひ
なりけして水を引く事にて十日と十二日
には潤ひをえつる事のかゝ。のみにて二三日に
は毎年かなく無難なり稲作をもまた定れ事僕が

國の風俗四ヶ所は代蔦西におゐても太のこくに
太く利根川の水をなせば以しはなるやと土人に
尋聞しに此辺なくも先年の旱魃なりし
村しや合せ大の遊ゆる利根川乃水戦
引取りし事の也しに場末の村々へも水
の引きざるに夜の溝筋へも溢かし此の如くも
水を溢らし事なりて郷方も申出論同士
喧嘩をなぶし水を溢へとし村よりは破のこん
悪くのといふく人足を車場へいふさへ場末乃
村は皆打擲となり大いに混乱せし事ありて

其後ハ僅に企る人もなく一村や二村やの力なく
ハ叶ひかたく此説のことくに出来たるよき稲作を
見殺しに致しぬる事と歎しハ哀れに思ひ
此用水の源を委敷尋ぬるに小合村の溜井より水
きたれハ此辺よりハ凡廿三里川役といふより
取ふひハ小合村乃溜井をへれそれを千あまりに
分水せる事なく　水道を曲りくゝ数里を
那るよし田場の千破土の白ゝなるにあつかく廿余
里河なるの水を汲れんことを　荘子か渇魚乃
説のことくなるへし　水の来るまつくにを稲乃

やしなひをうしなひ足ぬを地の利を捨ると
いふ其の世土人の摘語り　信州浅間山焼
崩してより土砂利根川に流入出しぬしと思
ふれ帆かけ舟の往来せる試遣なる村々より
遠見せるさ堤のうへを行やすく見え(?)しも堤う
ちの土地よりも川の水面に高く流るゝなれハ川
の埋りてたかくなりしハ高き水の時にを村々の
難儀となるとのなりゆきせめてハ至る旱魃にし
小川水のたかく流るゝを汲みてやましく(?)水を灌
〈全〉米一粒を地の利をいふへしうてさるや覚有

度々の之西葛西の地は水損の難ハ救ひかたく
旱損の難ハ逃るゝ所之戸根川を以て大河
の水を㝡のさきへ流して旱損させて地の利
をえたれとも上ハ下民乃譲ニ及ハす糧を絶へて飢
渇せしに同し夫の汗を志ほり草きり耕し
民の労せし心根を察せすして唯心ありて目
をふさきて通り行せし事之

様ニ出水のこゝるにハ八事として計白
歴きに知されハかハかハかし旱魃乃
難ハ後年ニ至るまて救ひかたき地の悲し

此地ニ稼して業ミしとなる所之

下小岩村

星住山善養寺新義の真言地ニして本寺ハ寺卅一
ケ寺の本寺なり御朱印下十石本尊地蔵菩薩
庭ニ不動堂をなりて境内を廣ろくとせし
あき寺之此寺の寶物星を称せるとのなり舎
利塔のことも䋶構なる塔の内ニ入れてあり一
見せしも奥州津軽の舎利濱より出る玉乃

如く書写して口是阿との光りあるものゝ首を
三星ありしを二星ハ飛去りて今一星ありといふ
庭前に星くだりの松と称せるもありて二星の社と
いふもあり僕諸州にて星と称せるものを得く
見しも悪星なりし故に阿上人阿浄下の祈り
蔵せしなどいひて寺の什物と成れり是ても
質ハ大のやき乃ものゝ据り世に云舎利と見え
さりて云舎利と称せるものあるくハ津軽石式を
有戸石式ハ貝の玉之結図に　血ある事なし
佛間のかざりものにもあまきとものゝ

下平井村

此地に代々源左衛門と云民家ありしハ代先祖の
源左衛門といひしハ勝れし大男の大力なりし故に
異人異名して大太と称し男大なる漁りとても
何事上手にして手縄三十尋の網をひきて大船
のりへゆくとも打越す程の術を得し者故に
大猷院様御放鷹の節ハ御一覧て　葛西近く
諸方にて網をひきて遠くいる鴨を打添く水に

へりて鑑を見る事を　上覧ましまし此時御廣
蓋として御船蒲団を下しめ今に持伝へて
家の宝物とす此時　ある前ふて御酒をめし一年
への盃ふて息を休めして二盃頂戴せり此時
時もまた盃をとらせよとの　上意ふて下しめ
是も家の宝とのみして　持伝へてあり太乃
二品拝見せしに御蒲団ハ目なれざる绮ふてかの
うめに染たる時ハ和国織のやうに見へれ遠く
拝しみれハかつて織りし〱〱〱稀なる绮なり
御盃ハ露亀松竹ふ橋のまき画ふて　結構

いまんかつ尊し太の外に御船を頂戴せしとの
言ひ伝へありおほとそへしハなと宜しかるへきよ
後年まて家の規模ともならしとのを頂戴して
子孫まて〱の面おこしとなる事浦山しといふ
愉しし外ふ唐をもつて事の御免許状ありかつ
まちの古文章ふて和るの能筆之御国印と
覚しき古ひなる御判あり此書ふ差向ふよりて
持伝へしとい申由緒なり

東小松川村

壽覺山源法寺浄土宗にて本尊阿弥陀佛
開山ハ普光観智大師にて御朱印ハ石高なると
古のことにて由緒知れす什物もなし

同村

醫王山普照寺新義の真言地にて本尊大日如
来御朱印ハ石由緒詳ならされと以前ハその訳なり
てや高寺の御朱印地ハ込みたる事なるへく僅に
石のこるなるへく寺百性十八に今も宮て在
なる處し

同村

縄地し一家なり三代以前の縄地しハ勢州松坂
の者なり
有徳院様在世し縄ひし縄さらして田畑数多
下しおハ今に持傳ふ事之世にも冥加に叶ひ
し家ともいはる事之

同村

以太忠といふ百姓の庭に

有徳院様御腰をかけさせたまひし臼なりとて大い
なる槻の臼に而覆ひをし国のごとく神にいはひ
て有りけりそなたれきるをなかれの為りとて
叶は下民といへるとも国恩を忘れましくとめて
り神と称しく大切に持傳ふ事 殊勝成事也
人かゆしくなりても君恩を知らざる者世に多し
是らの人とくらへ毎思ひいて貴き事也

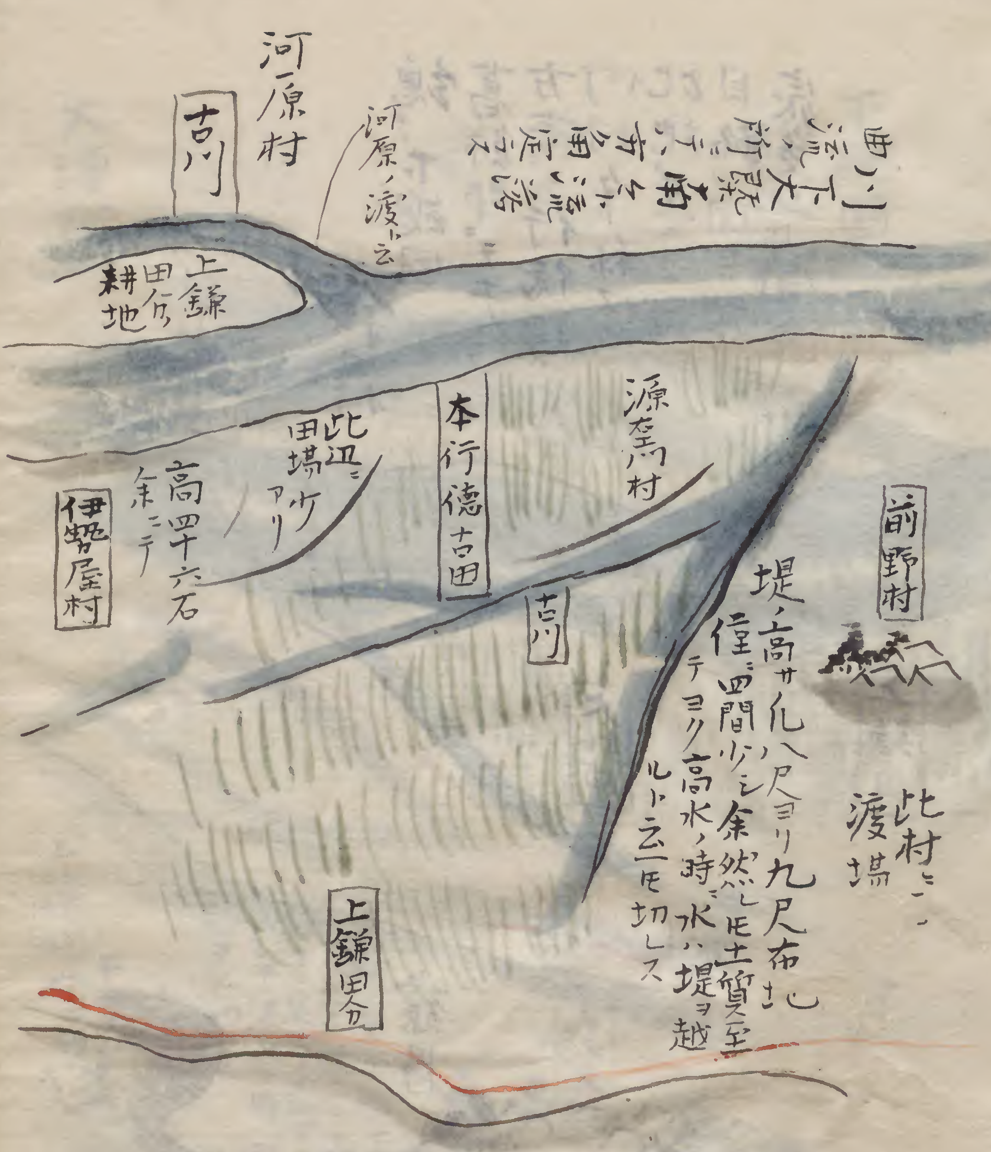
うそ叶ふ奴玉の
恵ミ哉 おとしやうや
厚くも 臼哉
祭り置なり

地の利を盡す事を利と欲せんとするには何にも
天より生ずる所をうけ給ふて人命を養ふ本
元なれば天地たり其五穀の生る道を荒地と
なしおく事ハおそれ能つきの理なり又
村落大かたハ陰田のある事ハ前しよりの御仁道
の不行より窮乏する事に何とて度に国せ出
所の野地ハ人力を労せさるを数百石も生る道
地ある村ハ是地の利に至る事を捨置して見
或荒野とある所ハ荒置きには又その之立寄り
く委しく見しに原野のうちに無用の古

堤度かし二ツあり是ハ度々川の流れつき
かゝりし時節に残りしハ尺たり汁土を
ひく利根川堤とし崩きにく或尺過りとし
築きかけとせバ大築のこる水をふせき古堤乃
跡を畑となり両益ある萬民を救ふの道けとある
在し何国におゐても川筋に堤を築事ある川
上流の村々より故障の筋をいふとのかく
是ハ足なる筋もある事しく其所の地の利を
気かつく世捨て捨置所また多し夫ハ古田乃
利をうしなふ故なりかくの事を念せる所ある内

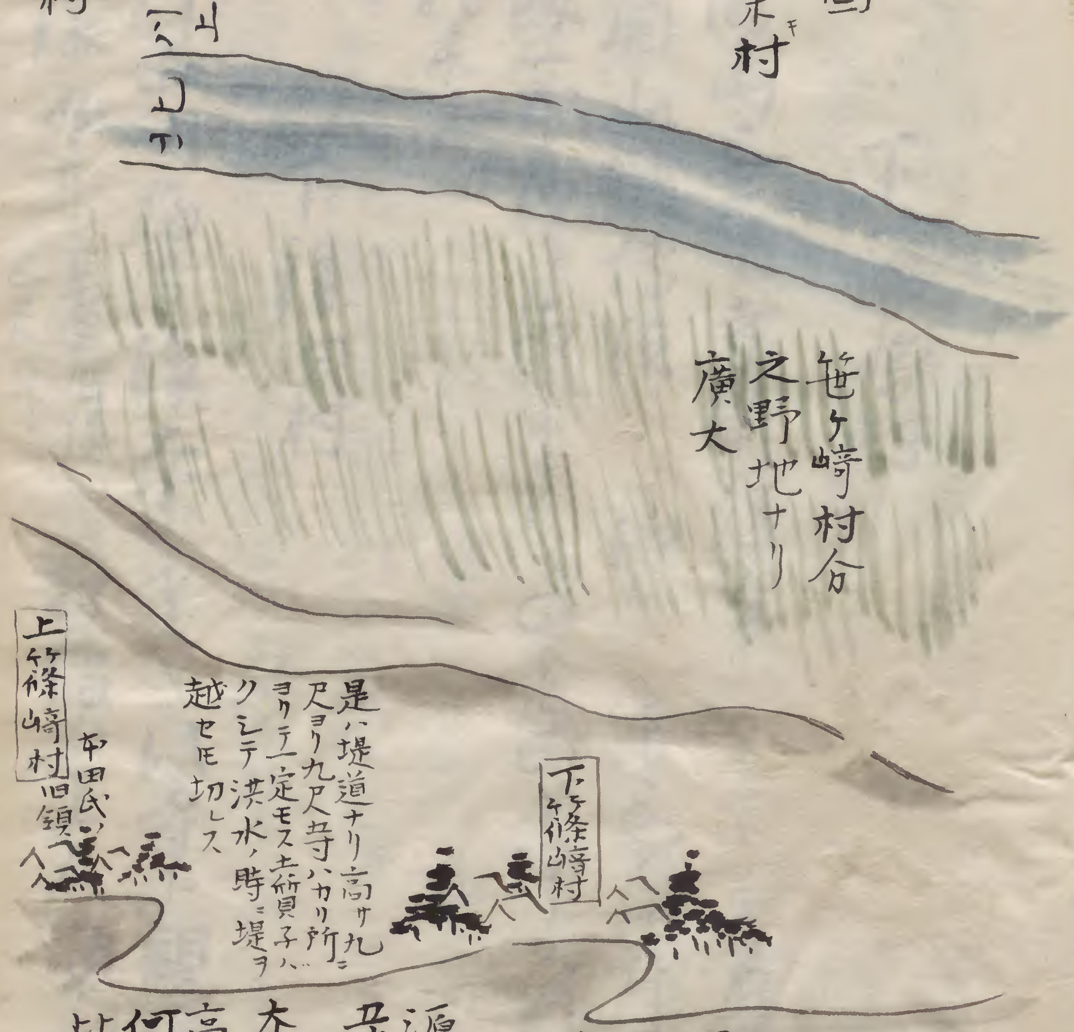
てくハ川上筋への村々へ陸りとなる地のたゞし
此ふなく今のまゝに捨置ても荒地の中に壌
流多しまく堤の所かくとしてかしくに置
土をするのこの事く海と遠ふかくされハ悪水を
ちく吐濤とありても上土貨移ありなりて落き
堤みくも他方の方を違ひて水につよく總て
の壌布僅ニ一尺間狭きハ一間なり洪水乃節
堤のちくを鍬にとりても破し崩る事さしに
なし毎し切る事ハ　説多き所なく
此穴より水溢して切るまてありと云勿論海

迫なく水の勢ひも切なく崩しさる理とみえ
し大泥せる事との事ハ往々にてあり施き所なるを
如く捨置く事ハ敢も何んかと僕猶深に
らとハれハ既止侍りぬ
久しく毎なされハ上郷遊行の世間を
行さきしの稲作ハ見田場によりて[illegible]を
白く乾されし所も多かりしに此辺ニ来り
てハ稲の生ひ立ちて見事なりて一天水
掛りさる田場ハことしもさく水まんしたり妥
しく尋ぬしに小合村用水筋より一宗の



水もたらはと云ふも満汐の时ハ悪水落
しの海へ利根川の水をさし入る事
ありそれを逆水しとて田場へ入る事
田ハかくの如く只今の拍子ありてハ豊年な
りと云人ハなきかりこに泣ハ哀ありく然ふ
思ひしらして見れハ世中の万事塞か
くの如し

總テ下總國
葛飾郡ニテ土人ノ
方言ニハ行徳領
何村々ト称ス
比地ニ至ラサレハ
目路ヨリ図セリ家
宗多シト聞キ



世の中は万事
皆かくのかし

図スル所ノ野地葦
葭繁茂ス夏ヨリ草
涼ト称シ地下ノ者悉
ニ恵ニテ上納スト云
源左エ門持ノ地所高
弐四石四斗九升七合
本行徳村ノ地所
高七十三石六斗四升四合
何レモ見所ノ水損場也
比外ハ荒地ナリ

下ノ藤澤村

金剛山無量寺新義の真言宗本尊阿弥陀佛開山快傳法印御朱印三石也此寺境に古き銀杏一本有り傍にしゝくのとの小河にて此外由緒知れず

下篠田村

天門山明福寺浄土宗にして此寺に親鸞上人の本像あり長二尺計座像にて如信上人常州に来りし也

〇の村は辺なる所にて大旱魃ありて百民のなげ
きにおよひけれは上人を見てなけきける此なへ信侍し
雨乞を頼しかは忽雨数日ふりて隣村までにも
およひ此地より止り終に支三年に至るに自ら
像をつくりて残し西の方と云寺のうしろに鏡
の池とて小なる池あり上人まくらとせし池にうつし
て像を作りたりしとぞ又まゝ袈裟掛松とて
ありしが是は枯れ倒れて株のみ残りて残れり外に
よき堂にありて聖徳太子の自作なりと云像并
又太子作の像と称する毘沙門像ありと云々観

音一躰何しもよき仏なりまた恵心僧都の画せ
るつけし仏画二幅宝物にて何しも能作能画
目を驚しぬ今の世にみるかくしてきたりて
流行す但し僧綱の自まん躰の縁記かくりきに
も但なる事に思ひぬ

西宮喜多村

此村に虎といふ百姓あり力諸人すくれ背たか
く長高く七十五貫目余のちからにて石をやすやすと
かつき米俵を首にかけて歩行せる程その強力なる

より或時杖木を舟につミて江戸にいづる杖木
問屋場にて江戸にて讒ハ組にて莫つき
たる者数人出て杖木を河岸へ揚させしと出
し時虎二間ばかりの杖木を竹杖にのせ来りて
こらしめけるに河岸へ飛あがりしかば讒ハ
組の三輩に力あるに感じて杖木を浮へ揚させ
其上酒など賜ひて智者とぞ見りしよし此
虎が力ちからに似たる納屋抔尋和とのみ云々
孝之父ある甚く然れバ母に仕ふる事祈んだ事
ありしよし委敷尋ねしに兄弟二人ありと

いひ貧しき家にして妻をむかへし故虎女乃
業をなし水を汲み飯をかしきて母の寄成
者なる事弟なり男を力なる事を聞て
王垣観之母と云ひし弟方より庭へ来りて
其子とし関丸にもんといふ友遂をよりし遂メ
かれを兄嫗の向にされバ母の苦労を見て
遂メに應せし母ゝ来の子なりし故に平生虎
おしと童子を待ちてよみ孝をとふて虎を大
男にてアイしといふて母の言葉を守りて居ざる
人親ひとしく感じしと云て母なき十年

以前ハなかれ今ハ江戸にならひかしまし高ひと
業とせるよし今年〆金丈の志ときて武右
必孝子の門よりおこると又ハ櫛母しき男子とも志
かゝる大力なれと聞書取るなる由し其の行状を
いくかりや詳ならねと大手茶屋の相続かくも捨り
世間を速念なりと夜もなる事なし

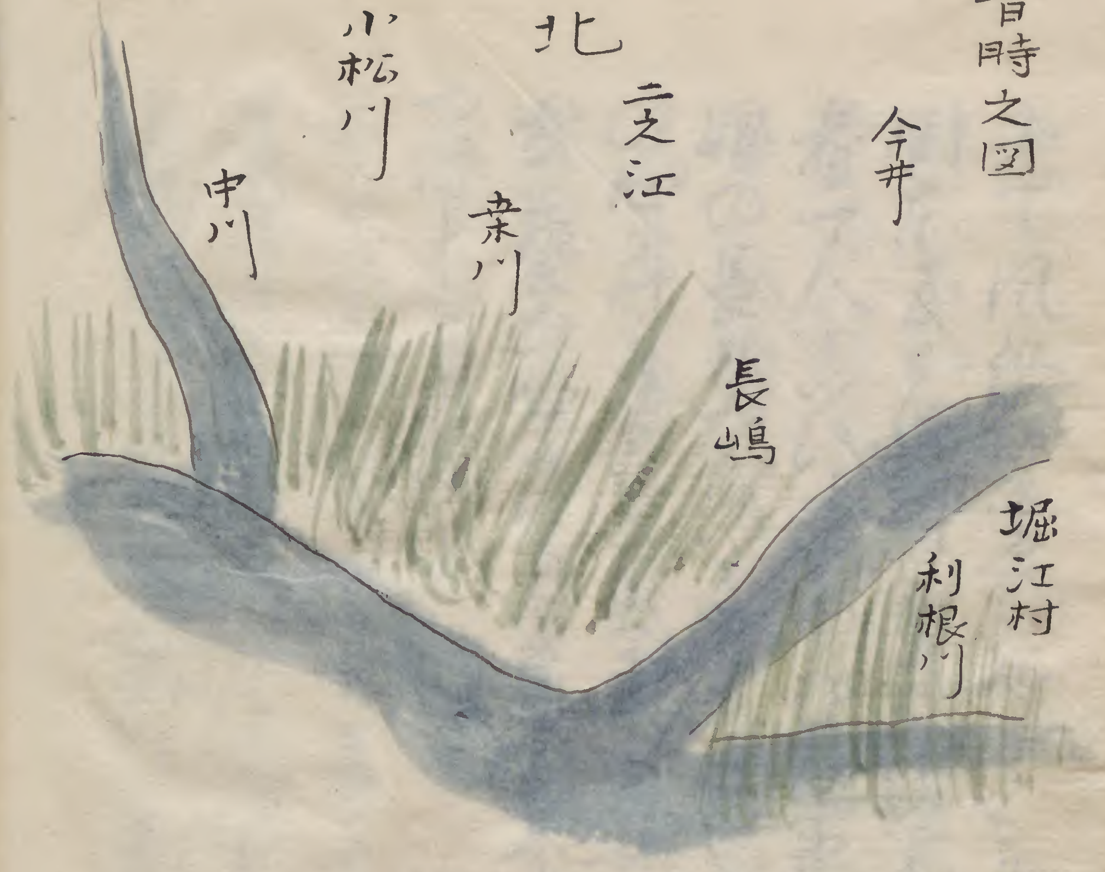
下今井村

此日ハ暑に極へ多くなれりこ椽におかく涼居しに
十七八なりの小女子なる長刀に木刀をもちて前に立ゝき

由退居りとはる由し治一應には挨拶之ていふやく
起前へ入り奴さとくをはるし武術をたしなめ
ありんとの言ひとく居らしにやとはうく座り
木刀の善悪へしにありてことなく尻しに彼少
女長刀をとり女たちの見をも相手ミし如くにて
飛返へ立りく多をうけ当てこそけしきなりし
なりぬ勝ひく一しまの尻との成りし婦人乃
武術殊り百姓てつかくを称誉せへきたりと
はりされ其男子の気象素しぬ婦人の武芸
とゝふハ上方中国西国ハ聞りくハ夏中も知ら申事

にて風俗の違ひやふいたんもなし昔よりと
関東武士は剛勇にして上方嫋なる人に関東武
者一人といひしとも匹也右の少女の外にと
娘の長刀つかひを見るよし太平に居て武藝
の心がけあるを真武といふよし武士は家に居ても
武藝の心がけなきも多しされば浮世とは名
つけしものなり

昔時之図



遠カラヌ世マテモ図ノコトクアリシ地形ト見ヘタリ洪水ノ時ニ利根川今ノヤウニ直ニ突キリシ故ニ下總国堀江村ノ本田海中ニナリシモノト見ヘ侍リヌ記セル所ノ村ハ古ク昔時詳ナラス此外ノ村々ハ二百年以来海ノ付洲又ハ汐入ノ空地所ヲ田所ニ開発シテ村里トナリシモノトミエタリ

東葛西の通行勝りたりし風土の善悪哉
考へ見るに豊嶋郡よりハ足立郡の風土一段よく
足立郡より葛西郡ハ一入よろしく別て東葛西の
風土ハ大上々品也此地ハ至て百穀のそのほか野菜
ものに至るまでを他国に勝れ諸木草花乃類
其内のはなし且貴きも仰仁政ありて上方中国筋
よりも貴覧されハ日本第一の上地といふべし右村
小ありてハ富饒に民百姓ゆたかにくらしたれど尽
そしても中なる村々のあつてよろしかるべく
さるなり同し風土にて同し地の利を知ル

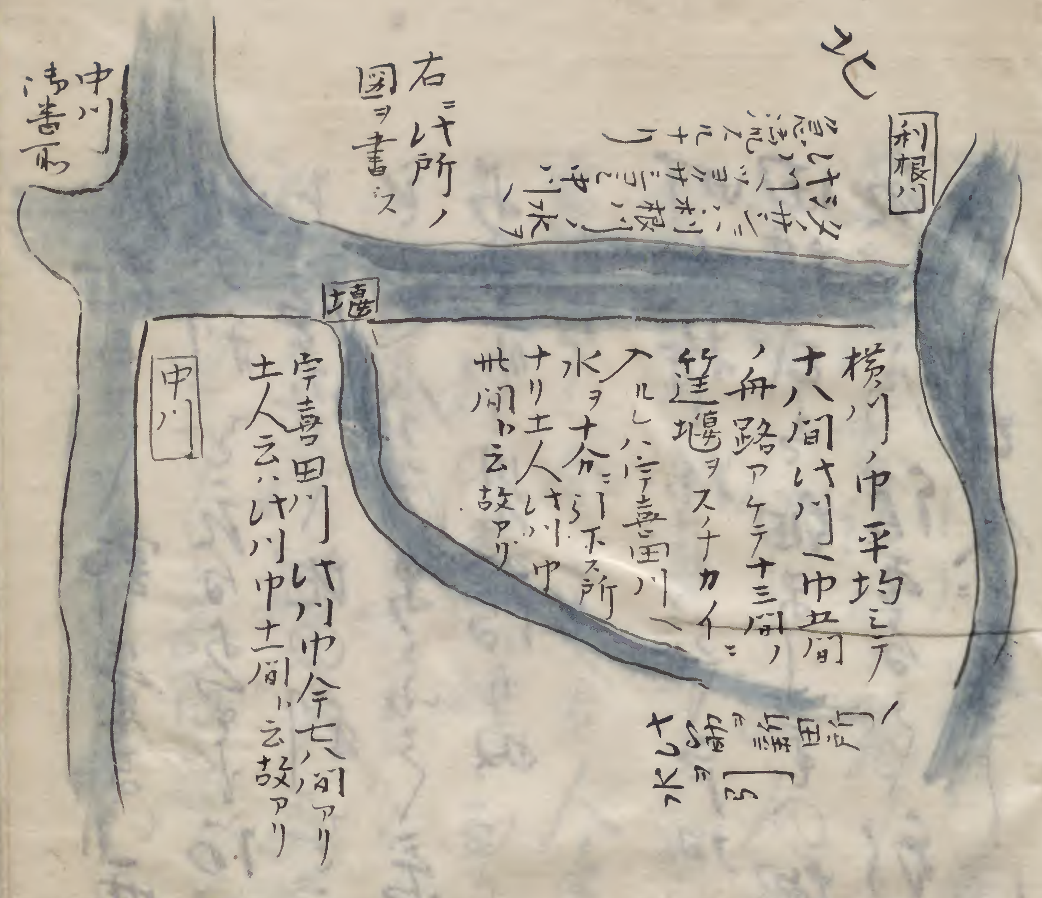
百性に何の益なく猶咎ある事やと云爰
探りて聞きて村の風俗なれしく村の中に住し人々
云人々の状を正しからぬものあれを何しきかるに深
あくるとあく一村の若きもの共も風俗にかゝる
て働きたり油断せるのこに何らも収獲の道
荒田畑の利を失ふ事を落く云七年の内
かくて他所を加へ他村一所の田畑を取まとてかく
貧困しせるとの事之何国にも多くと風俗乃
事にかしも油断なまきにとのくたに守せ
海所の村しに於ても村のお意にて人家と

多く何れも海と川有て深からし村益に人乃
知ら所あらぬ地の利もあれそのうへ漁家数多
かりく海川の利をえる事かなふに従ひ乃
肥しみと小海老海草などをいれ農業の隙に是を
図とい海草沼山なる益有ても是をえて用
とるし縄に裏は外諸品に製として竹貝ツヨキ也之海面の漁るは同しに見なる
事あらべくしき事益に村のをやに於よし
は辺みらく字表田海苔と称せる海苔は名産なく
肥後の水前海苔につきらく味よしと云こ不僕
食実の所八そろてもちて礼を知るとは辺の名主
知らぬ

いかしハ書をもよみ並の心かけとも有事なく
中以下の百性ハ勇を好ミ力たのみに石返ニも
打こみたる事之相応にくらせる百性ハとらへ
ちから武藝を争ふ様ニと足へされし之中にも桑
川村の名主ハ第一若きともみなみな質朴ニて
風俗よく人の手本ともなる人物ニ思ハしき事之
さて当世にも多る所の新田ハ所廣大なる事ニもなく土
質をも上しなく田場ハある時ハ地の利計り
加へし河成ニ細となしく並く事やと土人ニ
尋しに用水のこちなきハ成ニ及ハぬ地のすじ

をよく見れハ水道のなきにも河されとも
水筋の成隣他村の本田の邪ニ成る故ニ是非
なく細なく並く見え侍りし之横川より入
ましなる用水溝の幅ハ弐三間けすとも用水今少し
深く溝を穿り横川ニ堰のごとく堰をかけて用水
を引ハ他村田の故障ニもならずして二千石の
田所ハ養ふ可し幅六尺の溝に水の深サ弐尺
ばかり置親無滞水を引く時ハ二千石也千石乃
田所ハ養ふとのなれハ新田所残らず田場ニ
成ら只ニツ也して一ツハやまくと田として成事ニ

思ひし事なからこまての風俗もしりに田場の
水をもち溜かちき地なれや僕正要用の事
なれは修すへきにもあらすされとも只今所に
かゝる所なるなし新田より海面七八丁を
汐の干潟ほと付洲の見ゆる所多し我等なら
ほしく新田なりに付し葦原を新田となる
延し貢きのやすき所なれは河け湖にし
て塩浜かしくも上地となる海浜之利根川
中川より吐出せる水十七八丁のうちにては潮
に変ル故ヲ引合れて塩浜ともなる事はならざる



所なれは通ひ船かよひて
潮の流しこむ所なりて
波乱れて水気はなきにも
の之塩浜三百坪の地へ
潮汐入れて塩有
出しも年々割合せの
なるこその僕知らす地
所の貢き出さにやすき
地なれは通ひ船とも
ゆく河け潮にして

も畑となく野菜るい粟稗麦作なとなく
地の利をえたる事も何け而そし入用をうけく
を損なく地の利をえたる事ハ大益となるへし
その之今乃まゝなく其地をもわろく土質をまる
よき所と見え侍りぬ

町人持と称して戸根川筋小菅の付洲或ハ
田場或ハ畑ましての地所おいてもしき事
ありて作れるさく弥のよふに町人持乃ある
事やと云人に尋しに是も地所乃益をえたり

こたひに川堤乃普請するやうに覚へぬ
是も御普請所と聞しにさらく受渡して
免解して町人持乃地所ハ株とかなく
売買する事あり年々迫き隙迫も金子千両
宛事々今ハ人手に敷して渡りく
十人程の中間持と云り普請所のいみと村方
より借用してたうし候も多く一人前の事
なりしされハ摘への以前に倍し売買する所
今もやりし百両をうりに云りしと云代初ハ
いうての訳もなく町人持と云りく町人普請と

はなりし事なや古しへよりも利をはかる事
は商人も不及とはれさ定る町人の大益となる
筋ありての事なるべし

葛飾郡下之終

浅草文庫
日本政府図書
大政官文庫
内閣文庫
国立公文書館 National Archives of Japan

国立公文書館
National Archives of Japan